

思い出の風景としてのキャンパス*

— 関西学院大学社会学部卒業生調査の分析 (3) —

岡 本 卓 也**

1. 本稿の目的

卒業後、大学生活をふり返ってみたとき、思い出されることは何だろうか。大学生である期間は4年間と短い。しかし最も多感な時期の1つとも言え、様々な思い出が多く作られる時期であろう。あらためて言うまでもないが、大学は学習や研究活動を行うだけの場ではなく、友人たちとの出会いや部活動など、多くのことを体験する場でもある。また、その空間や施設面を見ても、大学という場でなければ見かけることの無いようなものも多い。このような環境の中で、人は何を記憶するのだろうか。また、それらはどのような場と結びつけられ、記憶されているのだろうか。本稿の目的は、関西学院大学社会学部卒業生調査のデータから、卒業後に思い出される体験や風景の特徴を明らかにすることである。

場所と記憶ということ考えたとき、古典的には歴史地理学や文化人類学の分野から様々な研究がなされている (Relph, 1976; Tuan, 1974 など)。あるいは Halbwachs (1968) などに端を発する集合的記憶という文脈からの研究もあるだろう。しかし、これらの研究の系譜はどちらかと言えば、場所にまつわる歴史を人々がどのように語り継いでいるのかという点に関心があるようである。また、実証的な分析については十分に行われていないのが実情である。

そこで本稿では、大学を卒業した人たちを対象に、思い出に残っている場所と、その思い出の内容をたずね、計量的な分析を行う。具体的には、思い出の場所や特徴を明らかにするために、卒業年代や性別といった属性ごとに思い出の場所を分

類し、検討を行う。大学生活の様子は、時代によって、建造物や景色の違いだけではなく、その時々時代精神とでも言うべきものの影響を受けていることや、性別によって生活のパターンが異なることが考えられるからである。

また、思い出の風景について考えると、場所アイデンティティや場所への愛着が重要な意味を持つだろう。例えば Relph (1976) は、場所アイデンティティの形成には、道路や建物といった物理的要素、他者との社会的相互作用、その場所に関連した意味やシンボルといった3つの要素の相互関連性が必要であると述べている。その中でも、特に場所に関連した意味やシンボルは、人々に共有されている価値の表現であり、その場所への帰属意識を提供する重要な要因であると述べている (Relph, 1976)。

このような場所アイデンティティに類似した概念として、コミュニティ心理学の分野ではコミュニティ感覚 (sense of community) という概念があり、社会心理学では集団アイデンティティという文脈から研究がされている (McMillan & Chavis, 1986; Duffy & Wong, 1996; Karasawa, 1991; 岡本・林・藤原, 2009 など)。コミュニティ感覚や社会的アイデンティティに関しては、様々な尺度が開発されているので、それらの尺度を参考に、場所アイデンティティ (大学に対する愛着) をたずね、それと場所の思い出についても検討する。

2. 調査の概要と分析の対象

2.1. 調査の概要

分析の対象となるのは2009年9月から2010年1

*キーワード：場所と思い出、卒業生調査、場所アイデンティティ

**関西学院大学社会学部准教授

月にかけて行われた「関西学院大学社会学部卒業生調査（調査主体：関西学院大学社会学部50周年記念事業委員会）」のデータである。調査の対象者は、社会学部卒業生（1960年～2009年）約24000名から単純無作為抽出法によって選ばれた7551名であり、有効回答数は2168票（有効回収率：28.71%）である（調査の詳細については渡邊（2010）、中野（2010）を参照）。

2.2. 分析の対象

この調査では、社会学部の卒業生に、卒業後のライフコースなどにあわせて、学生時代の勉学や生活についても質問している。本稿で主要な分析の対象となるものは、「思い出の場所」と「その理由（自由記述）」である。具体的には1960年、1980年、1990年、2009年の大学MAP¹⁾を提示し（図1～4）、在学していた頃に最も近い地図を選んでもらった上で、以下のような質問でたずねた。

『学生時代を思い出したとき、思い出深い場所はどこですか。あればその場所を丸で囲んでください。また、なぜその場所が思い出深い場所なのでしょう。具体的にお書きください。地図内にない場所の場合も、具体的にお書きください。』

「思い出の場所」については、複数の施設にまたがる大きな丸が描かれている場合には、施設名が含まれているものを全て選択した場所とした。また施設名が書かれていない箇所にも丸が描かれている場合には、「その他」とした。

これらのデータと、基本的な属性（回答者の性別、回答者の卒業年カテゴリ）、および関学に対する場所アイデンティティとの関連を見ていく。具体的にはKarasawa（1991）、岡本・林・藤原（2009）を参考に、「関西学院大学に愛着を持っている」、「関西学院大学に思入れがある」、「現在

でも関西学院大学に強い結びつきを感じている」、「関西学院大学の人たちが好きだ」、「関西学院大学のOB・OGには、いい人が多いと思う」、「できるなら関西学院大学に関係ある人と関わりたい」、「関西学院大学を卒業したことを誇らしく感じている」、「関西学院大学のOB・OGであることをうれしく思う」、「関西学院大学のOB・OGであることをよく意識する」の9項目を「1. とても当てはまる」から「5. 当てはまらない」までの5件法でたずねた。分析にあたっては、それぞれの得点を反転し、関西学院大学への愛着が高いほど、点数が高くなるように調整した。

3. 結果

3.1. 「思い出の場所」の違い

3.1.1. 年代による「思い出の場所」の違い

表1は、学生時代の思い出深い場所としてあげられた上位10箇所を卒業年代²⁾ごとにまとめたものである。「中央芝生」はあらゆる年代を通して多く、20%以上の人が思い出深い場所としてあげている。「時計台」や「社会学部」も一貫して10%以上の人が思い出深い場所としてあげている。

一方で「第五別館」は70年代（22%）、80年代（15%）と高いのに対して、90年代以降は6%、3%と低い値になっている。同様に「学生食堂」についても80年代までは10%から15%くらいと高い推移を示しているが、90年代からは1%を下回っている。もちろんこれは「学生食堂」の建物自体が無くなったことによるのだが、自由記述の内容を見ても、代わりに建設されたその他の食堂については「学生食堂」ほど多く語られることはない。

90年代以降に思い出深い場所として増えてきたのは「学生会館新館」で、90年代37%、2000年代24%と高い値となっている。「学生会館新館」は1984年に作られた建物であり、各種学生団体のための合同部室などがある。

1) 各年の地図は、関西学院大学が入学生に配布する「大学案内 学生生活編」に掲載された地図を参考に作成した。そのため、同じ施設でも時代によって名称が異なることがある（例えば「グラウンド」と「運動場」など）。分析においては、これらは同じ場所として扱った。

2) ここでは、便宜的に10年ごとに分類した。卒業年代ごとの度数（比率）は、60年代：329人（15%）、70年代：531人（26%）、80年代：503人（23%）、90年代：420（19%）、2000年代：384人（18%）である。

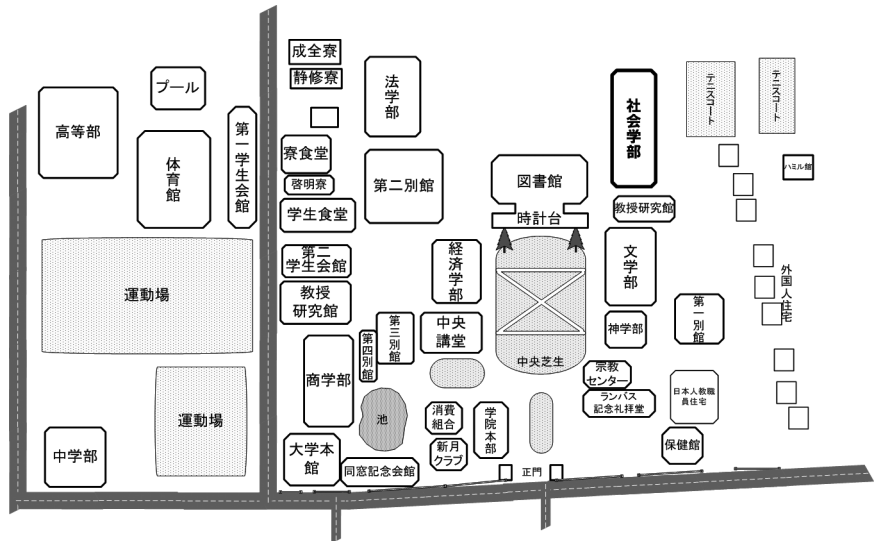


図 1 1960年頃の関西学院大学の建物位置図

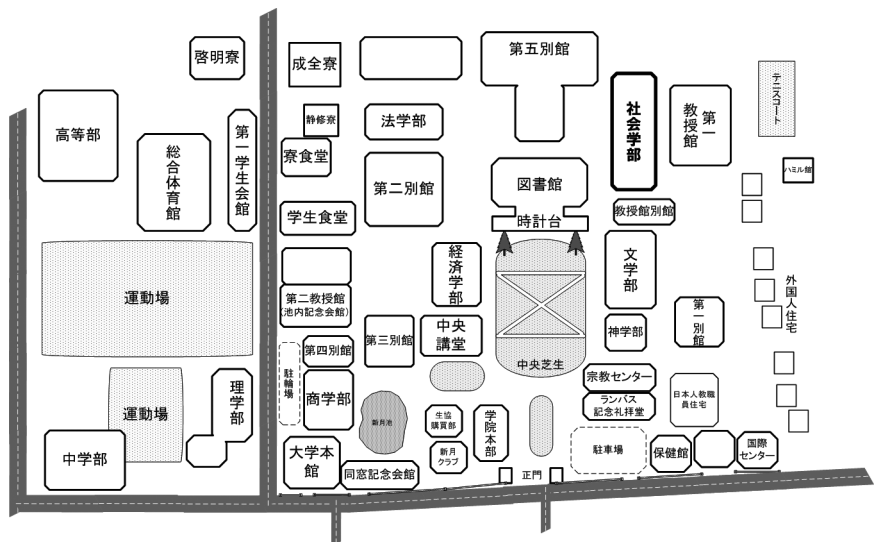


図 2 1980年当時の関西学院大学の建物位置図

表 1 卒業年代ごとの「思い出の場所」の出現頻度の割合

	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代
1	中央芝生 (37%)	中央芝生 (42%)	中央芝生 (39%)	学生会館新館 (37%)	学生会館新館 (24%)
2	時計台 (14%)	第五別館 (22%)	社会学部 (19%)	中央芝生 (33%)	中央芝生 (22%)
3	図書館 (13%)	社会学部 (20%)	時計台 (16%)	時計台 (19%)	社会学部 (15%)
4	社会学部 (12%)	時計台 (20%)	第五別館 (15%)	社会学部 (17%)	図書館 (14%)
5	学生会館旧館 (9%)	学生会館旧館 (17%)	学生会館旧館 (15%)	図書館 (15%)	時計台 (12%)
6	学生食堂 (9%)	学生食堂 (14%)	図書館 (14%)	学生会館旧館 (11%)	学生会館旧館 (11%)
7	日本庭園 (4%)	図書館 (13%)	学生会館新館 (13%)	第五別館 (6%)	E号館 (4%)
8	第五別館 (3%)	第二学生会館 (10%)	学生食堂 (12%)	社会心理学研究館 (4%)	第五別館 (3%)
9	運動場 (3%)	宗教センター (6%)	社会心理学研究館 (6%)	宗教センター (3%)	B号館 (2%)
10	第二学生会館 (3%)	社会心理学研究館 (5%)	宗教センター (3%)	ランパス礼拝堂 (3%)	総合体育館 (2%)

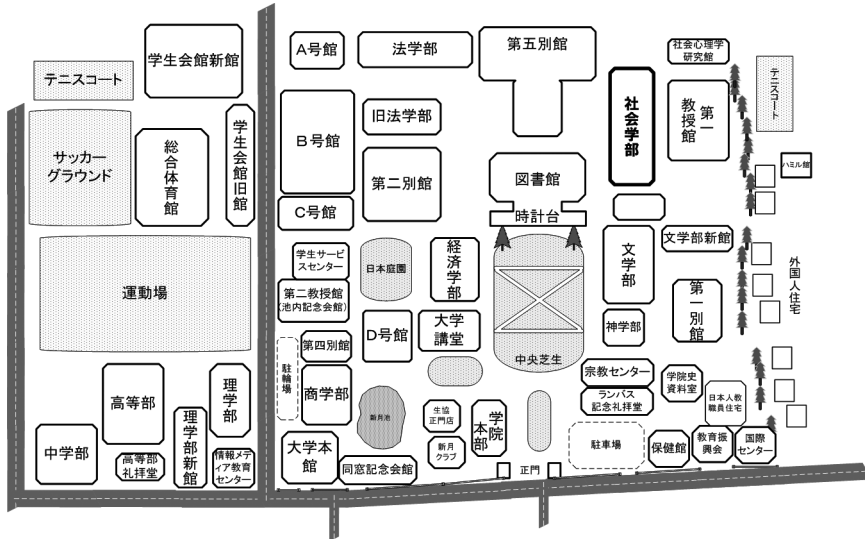


図3 1990年当時の関西学院大学の建物位置図

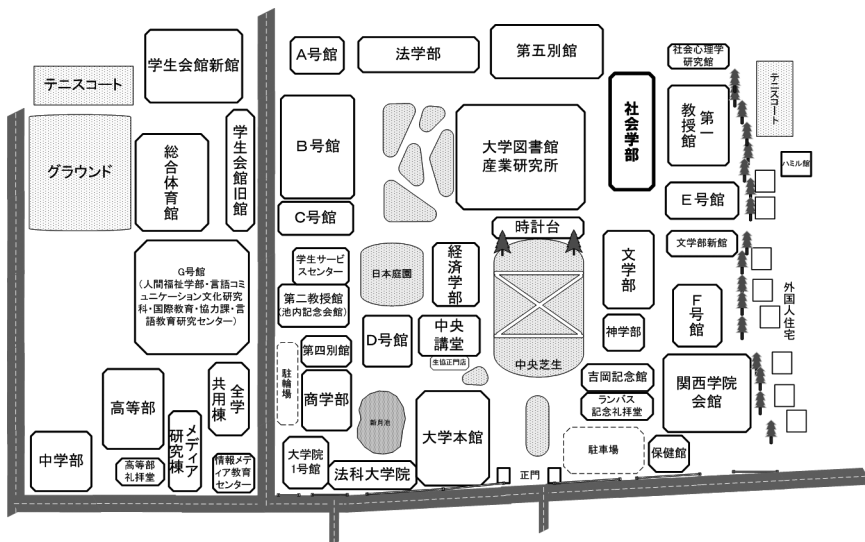


図4 2009年当時の関西学院大学の建物位置図

3.1.2. 性別と「思い出の場所」のクロス集計

性別による「思い出の場所」の違いは、ほとんど無い（表2参照）。順位については入れ替わる部分があるものの、上位10ヶ所のうち8ヶ所は男女ともに同じ場所である。異なる場所としては男性に「第二学生会館」「運動場」が含まれ、女性にはそれらがなく、代わりに「宗教センター」「日本庭園」が選ばれている点である。

表2 性別ごとの「思い出の場所」の出現頻度の割合

男性		女性	
1	中央芝生 (27%)	中央芝生	(26%)
2	時計台 (11%)	社会学部	(15%)
3	社会学部 (11%)	学生会館新館	(14%)
4	大学図書館 (9%)	時計台	(13%)
5	学生会館新館 (8%)	大学図書館	(12%)
6	学生会館旧館 (7%)	学生会館旧館	(12%)
7	学生食堂 (7%)	第五別館	(8%)
8	第五別館 (7%)	学生食堂	(3%)
9	第二学生会館 (3%)	宗教センター	(3%)
10	運動場 (2%)	日本庭園	(3%)

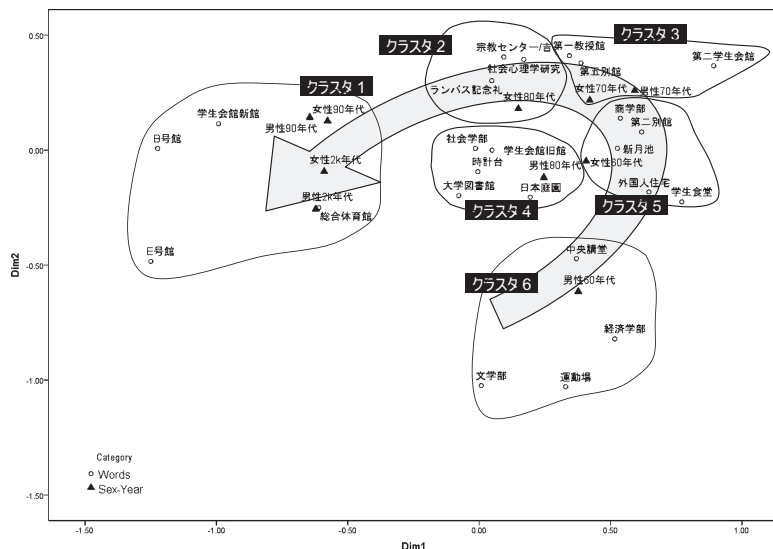


図5 「卒業年代と性別」と「思い出の場所」の対応分析の結果

3.1.3. 卒業年代・性別と「思い出の場所」との対応分析

卒業年代と性別の組み合わせによって「思い出の場所」に違いはあるのだろうか。図5は「卒業年代と性別」の組み合わせと「思い出の場所（出現頻度10以上）」のクロス表をもとに、対応分析を行った結果である³⁾。また、図中の円は対応分析によって求められた座標を元にクラスタ分析（Ward法）を行い、その結果から6つのクラスタを採用したものである。

左上のクラスタ1は90年代以降の男女と「E号館」「学生会館新館」など80年代以降に作られた建物によって構成され、クラスタ2は80年代の女性と宗教関連の施設を中心に構成されている。それぞれの建物が建築されたばかりだと思いの場所として選ばれやすいといえるだろう。クラスタ3は70年代の男女と「第一教授館」「第五別館」「第二学生会館」などで構成されている。これらの建物はいずれも学生運動の中心的場所となった建物であり、特に思い出深い場所として選ばれて

いるのだろう⁴⁾。クラスタ4は80年代男性と社会学部、時計台、クラスタ5は60年代女性と学生食堂や新月池、クラスタ6は60年代男性と中央講堂や運動場から構成されている。時代の変遷に注目すれば、図中の右下から「つ」の字のように時代が新しくなっていることが読み取れる。

3.2. 各場所で喚起される「思い出の内容」

「なぜその場所が思い出深い場所なのか」についての自由記述の内容を、形態素解析ソフトMeCab⁵⁾を利用して、単語に分割し分析を行った。その結果、表3のような単語が頻出単語として抽出された。なお、助詞、助動詞に加え、「ここ」「あそこ」「私」「僕」などの代名詞や「地図」「北」「右」などの図中の説明に関する語句は除外した。また、「中芝」「芝生」などは「中央芝生」に、「学館新館」「新学館」などは「学生会館新館」に、「第5別館」「第5別館」「五別」「5別」は「第五別館」に、という具合に略称や通称など、同一の場所と判断できるものについてはすべて置換処

3) 「中央芝生」については、全ての条件で共通して高い頻度で出現しており、全体としての比率が高すぎるため（26%）、対応分析からは除外した。

4) 「関西学院大学1971年卒業生アルバム」参照

5) MeCabは、京都大学情報科学研究科と日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所の共同研究を通じて開発された形態素解析エンジンである。ソフトのダウンロードや詳細については下記のサイトを参照（<http://mecab.sourceforge.net>）。

理を行い、同一の場所として扱った。また、ひらがな、カタカナ、漢字の表記の違いについても統一した。さらに「友だち」「友達」「友」「学友」は「友人」へ、「お昼ご飯」「お昼ごはん」「昼食」は「ランチ」へ、「おしゃべり」「お話」「会話」「コミュニケーション」「雑談」「長話」「談笑」「談話」「歓談」は「お喋り」への置換処理を行った。

思い出の内容として最も多く言及された語句は、「友人」である。「思い出深い理由」への回答者数が1965人であったことを踏まえれば、1人1回以上(1.42回)の頻度で「友人」との思い出を

語っていることになる。「友人」抜きに思い出が語られることは少ないようだ。つづく「中央芝生」や「サークル」を含んだコメントの典型例を見ると、「中央芝生」や「サークル活動」での「友人」との思い出であり、多くの人が友人を通して思い出が形成されていることが分かる。具体的なコメントの例をいくつか紹介する。

中央芝生にすわり、友人と話をしたり、ゆっくりと時間をすごしたことが思い出されます。

表 3 頻出単語の一覧(頻度100以上)

単語	頻度	単語	頻度	単語	頻度
友人	2798	先生	299	写真	147
中央芝生	1879	ランチ	279	体育会	145
サークル	1593	学生	277	田中國夫	145
授業	1473	食べ物	269	昼休み	144
時計台	1250	学生会館新館	261	文学部	141
活動	1070	入学	252	在学 中	141
部活	1049	甲山	251	学園祭	140
社会学部	997	ロビー	243	美味しい	140
部室	971	食事	242	受験	139
学生会館	936	長い	230	宗教センター	135
食堂	843	合間	223	部屋	135
良い	823	懐かしい	215	学生生活	133
図書館	740	ランバス礼拝堂	203	待ち合わせ場所	127
練習	732	下宿	200	卒業論文	125
大学	731	色々	191	青春	123
毎日	634	雰囲気	186	新月池	122
第五別館	546	本	185	外国人住宅	122
ゼミ	506	校舎	183	ベンチ	121
利用	496	先輩	181	グラウンド	120
お喋り	482	間	180	記憶	120
シンボル	474	学生時代	177	時代	117
風景	445	生協	177	静か	116
たまり場	434	皆	175	同好 会	114
話	389	一緒	175	クリスマス	112
多い	388	拠点	170	交流	111
楽しい	385	空き時間	168	裏	110
深い	381	使用	167	チャペル	109
印象的	358	喫茶店	165	高等部	108
好き	356	日本庭園	164	試験	107
正門	342	生活	164	放送部	104
学部	320	集合場所	161	開放的	103
美しい	311	社会心理学研究館	159	心	103
待ち合わせ	308	1F	155	入学式	101
通学	306	教室	151	大変	101
所属	303	中心	147		
勉強	300	課題	147		

サークル活動の拠点だった（五別ロビー）。講義のない時はそこに行くと、メンバーが誰かいて話
ができた。

しかし、必ずしも全ての卒業生が友人たちとのことだけを思い出として語るのではなく、「授業」や「図書館」での勉強の思い出も上位に入っている。具体的なコメントの例は次のようなものだ。

社会学部、第五別館は授業でお世話になりました。中央芝生はわれわれの大きなソファー。

時計台・図書館—当時、単に試験勉強だけでなく、自らの関心のある分野の勉強をしていた。社会学部—専門分野の勉強の場であった。

さらに、これらの語句の共起関係を明らかにするため、語句の共起頻度を語句間の類似性と見なし、MDS（多次元尺度構成法）の1つであるProxscalによって2次元解の布置を求めた（Stress=0.16）。図6は、2次元の座標値に基づいて各単語を布置したものである。また、理解しやすくするため、場所に関わる語句については▲で表し、その他の語句を○で示した。

MDSによる多次元空間を解釈すると、図中の左上は「生活」「練習」や「高等部」「下宿」など

集団活動をもとにしたコメントや場所が多く、反対に図中の右下は「チャペル」「クリスマス」「待ち合わせ場所」「心」など、個別的な側面に注目したコメントや場所が多い。そのため、左上から右下への軸は「集団的・共有的」⇔「個人的・個別的」の次元として解釈できるだろう。また、図中の右上は「風景」「写真」「甲山」といったように、景観や視覚に訴えかける美しさについてのコメントが多い。反対に左下には、「交流」「試験」など体験や活動に関するコメントが多い。そのため、右上から左下への軸は「静的・視覚的」⇔「動的・体験的」の次元として解釈できるだろう。

左上に布置された語句を含む具体的なコメントの例をいくつか紹介しよう。

中学部、高等部、大学と10年間、アメリカンフットボールの活動をし、精神、肉体の鍛錬の場所であり社会人としての活躍の原点になった。

静修寮で4年間、いろいろな人と共同生活ができ、様々な楽しい行事を経験できて人間形成に役立った。

中・四国地方出身の友人の下宿宅で教えられ、よく徹マンをした六番町の下宿屋さん。

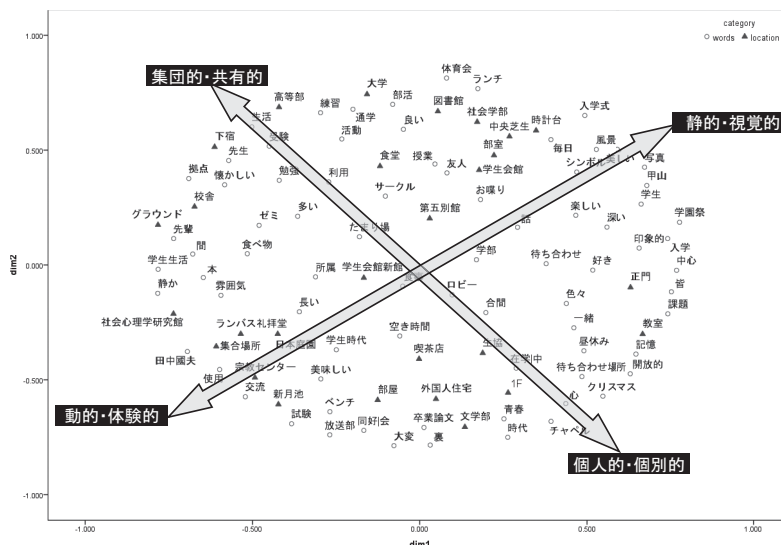


図6 「思い出の中身」のMDSによる2次元解の布置

講義のない時間には、学生会館で部活動の練習をしたり、又、そこに行けば必ず誰か友人や先輩・後輩と出会えたので、しゃべったりして過ごした。

これらのコメントで語られている場所は、集団で行う出来事や友人たちと集まる場として、あるいは友人たちと共有される時間を過ごした場所として思い出されている。それに対して、右下に布置された語句を含むコメント例としては、以下のようなものがある。

各学部毎に、チャペルアワーが催されていましたが、学部毎にハシゴしたりしました。又、宗教センターで行われる読書会などに参加したりしたものです。神学部の礼拝も、ランバス礼拝堂で1度だけのぞいた事があり、宗教色の濃い内容で、おごそかな感じで、学部のととは、随分カラーが違うなあと思ったものです。

クリスマスはとても素敵でした。一度試験期間中に大雪が降って、学生が作ったと思しき雪ダルマがあって印象に残っています。

通学には仁川駅を利用して、仁川から来ると正門を通らず、閑静な近道を通して社会学部まで行くのが、「社会学部・文学部の特権」のようでした。

関学のシンボリック存在、毎日門をくぐって青々した芝生と時計台を見て登校するのは嬉しくてたまらなかった。4年間毎日みても、決してあきることのない私の青春でした。

これらは、どちらかと言えば、個人の思い入れの強い場所や、個別的な出来事を中心とする内容が多いといえるだろう。

つづいて、「静的・視覚的」⇔「動的・体験的」を意味する軸の右上に布置された語句を含むコメントの例を見てみよう。

待ち合わせ、ランチ、昼寝、キャッチボールなど皆の憩いの場でもあり、入学式、卒業式でも必ず写真を撮る関学の象徴的な場所。

入学式を行った場所であり、毎日、中央芝生を見ながら社会学部に通っていたから。中央芝生ではたくさんの学生が思い思いの過ごし方をしていたのでその様子を見るのも楽しかった。時計台越しに見える甲山が季節を感じさせてくれた。四季折々、ハツとするほど美しい日があった。

時計台は関学のシンボル的存在、毎日門をくぐって青々した芝生と時計台を見て登校するのは嬉しくてたまらなかった。4年間毎日みても、決してあきることのない私の青春でした。

時計台と甲山を望む“景観”（都心の大学などはビルだけの学舎もあります。数十年変わらぬ景観は豊かな心象風景として貴重なものです。幼少期の郷里の風景に通じるものがあります。）

正門から見る時計台のある図書館、中央芝生の景色は、大学生生活の4年間、毎日が楽しみであった。若い心に、いつも精神的なエネルギーを与えてくれる気がした。

これらに共通して語られる内容は、活動している内容やそれへの評価と言うよりは、景色、景観といった視覚に訴えかけるものが多い。それに対して、左下の空間に布置された語句を含むコメントを見てみると、場所への評価ではなく、その場で行われる活動についての記憶が語られている。コメントの例としては以下のようなものだ。

同好会サークルで、5別のロビーを部室がわりに使用していて、授業の合間にしょつ中、通っていました。

社会心理学研究館は私たち田中ゼミが在学中に建設した建物です。大工さんに「セメントの砂利」がないと言われたら、河原で採取してきたり、天井に釘打ったり、天井を踏み抜いたのも私たちです。私たちの学生生活のすべてがこの研究館の中にあります。3、4年のゼミの間の昼食は、すべて3年生が班別に買い物、調理したものです。「卒業論文ダービー」（卒論提出レース）をしたのも、研究館です。レジュメ作り、発表…思い出がつまっています。

所属していた部の部室があり、授業の合間や放課後に仲間が集まり語ったり、部活動を行ったから。他の学部や学生や先輩、後輩との交流の思い出があります。

友人との集合場所、登校し授業をうけたあとかならず寄った場所。誰かに会えるから。

3.3. 場所アイデンティティと「思い出の中身」

3.3.1. 場所アイデンティティ（場所 ID）の得点

本調査で得られたデータを分析したところ、各項目間の全ての相関係数 r が.40を上回り、平均で $r=.59$ と高いことから、1因子構造と見なし全9項目の平均点を大学に対する場所 ID 得点とした。表4は、年代と性別ごとの場所 ID の平均値と標準偏差である。性別と卒業年代の2要因分散分析を行ったところ、性別の主効果のみが認められた ($F(1,2091)=4.94, p<.05$)。男性の方が大学に対する場所 ID 得点が高いことがわかる。

3.3.2. 場所 ID とコメントの対応分析

大学に対する場所 ID 得点の高低によって思い出される内容には違いがあるのだろうか。そのことを確認するため、場所 ID の得点をもとに、場所 ID 高群 ($M=4.57, SD=0.31$)、中群 ($M=3.89, SD=0.09$)、低群 ($M=3.19, SD=0.48$) と3つの群に分けた。

図7は「場所 ID の高低」と「思い出の中味（出現件数50以上）」の語句との対応分析を行った結果である。また、図中の円は対応分析によって求められた座標を元にクラスタ分析（Ward 法）を行い、その結果から3つのクラスタを採用したものである。クラスタ2と3は比較的近いランクで結合されるため、上位のクラスタも記載している。

場所 ID 得点が低い群を中心とするクラスタ1は「図書館」「話」「お喋り」「食堂」などの語句によって構成されている。場所 ID 得点中群のクラスタ2は「サークル」「シンボル」「たまり場」などの語句によって構成されており、高群のクラスタ3は「風景」「毎日」「部活」といった語句に

表4 条件ごとの場所 ID 得点

	男性 平均値 (SD)	女性 平均値 (SD)
60年代	3.94 (0.65)	3.82 (0.75)
70年代	3.92 (0.65)	3.74 (0.71)
80年代	3.98 (0.71)	3.85 (0.66)
90年代	3.82 (0.70)	3.79 (0.74)
2000年代	3.85 (0.89)	3.93 (0.70)

よって構成されている。全体として捉えるならば、場所 ID の低い群から高い群に変化するにつれ、友人のお喋りや集いから、景観についての思い出が語られることが多い傾向にあるのだろう。ただし、次の2点に留意すべきであろう。1点目は、そもそもの場所 ID が全体的に高く、場所 ID 低群においても中点である3点を超えていることである。2点目は、「友人」はそもそも出現頻度が高く、多くの卒業生が言及しているという点である。これらを踏まえれば、場所 ID が高い群は、友人を通じた思い出に加えて、景観についても言及していると考えられる。

4. まとめ

本稿では、社会学部卒業生調査のデータに基づいて、場所と思い出の関係について分析してきた。主な分析対象は「学生時代を思い出したとき、思い出深い場所はどこですか。あればその場所を丸で囲んでください。また、なぜその場所が思い出深い場所なのでしょう。」という質問に対する回答であった。その特徴をまとめてみると、(1) 時代ごとに思い出の場所に違いがあることや、(2) 思い出の多くが「友人」を通じて語られること、(3) ある特定の場所ならではの思い出があること、(4) 大学への愛着が高くなることで、景観についての評価も高まることなどが明らかになった。それらを確認しつつ、思い出に残る場所とは何なのかをあらためて考えてみよう。

関学のシンボルともいえる「中央芝生」や「時計台」などは、年代や性別を問わず一貫して多くあげられていた（表1、表2参照）。大学生活において最も長い時間を過ごすのは、学びの場である「社会学部」や「第五別館」「E号館」であろ

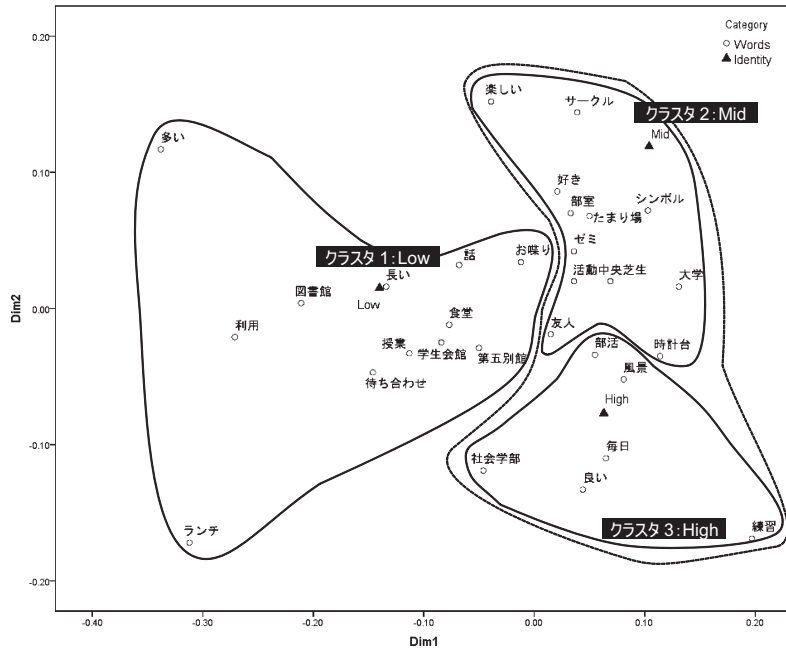


図7 「大学への愛着」と「思い出の中身」の対応分析

う。しかし、それらを押さえて中央芝生や時計台が多く選ばれていた。つまり、長い時間を過ごしているだけでは、思い出深い場所として記憶に残らないようだ。むしろ、その場所で誰と何をしたのか、ということによってその場所が深く記憶に残るようである。

このことは、第五別館の頻度の変化に端的に表れている。1970年代に第五別館は大学紛争の舞台となったため、1970年代は突出して第五別館が思い出されることが多い。それ以後も授業で利用されるだけでなく、サークルの集合場所などに利用されているため、10%前後で選択されるものの、その割合は徐々に減ってきている。また、学生会館新館は1984年に建設されるまではもちろん頻度0なのだが、それ以来、常に多くの人の思い出深い場所となっている。学生会館新館には、各種学生団体の施設があり、サークル活動だけではなく、「空いた時間にそこに行けば友人と会える」というコメントに代表されるように、集いの場となっているようだ。その他にも、学生会館新館には食堂や生協があり、学生生活の中心となっており、思い出深い場所として機能するのだろう。

また、思い出の場所に対するコメントを見ると、「友人」という言葉が最も良く用いられてい

た。このことから、思い出深い場所として記憶に残るのは、誰と何をしたのかということが重要なのだろう。つまり、誰かと何らかの行動を行う空間を提供できる場所が、思い出深い場所として記憶に刻まれているわけである。

しかし、必ずしも友人たちとの活動場所が思い出深い場所として記憶されるわけではない。その対極には、個人的で視覚に訴えかける場所も思い出として記憶される。例えば、美しい景観はそれだけで記憶に刻まれているようだ。特に場所アイデンティティの中高群の卒業生たちには、大学のシンボルである中央芝生や時計台ははじめとする美しい景観が記憶に残り、青春時代を思い起こしてくれるようである（図7参照）。このような景観の美しさについては「毎日」という語句との関連も強く（図6、7参照）、何もない日常の中で癒しの空間（景観）、日々の活力を与えてくれる空間（景観）となっていたのであろう。

図6のMDSによる2次元布置について、どちらかと言えば思い出の内容に焦点を当てた解釈を行ったが、各場所に着目し、空間の機能的な側面から図6を解釈することも可能である。例えば、南・難波・塚本・小原・上向・吉田・松崎（1994）は、空間が子どもに与える機能という観

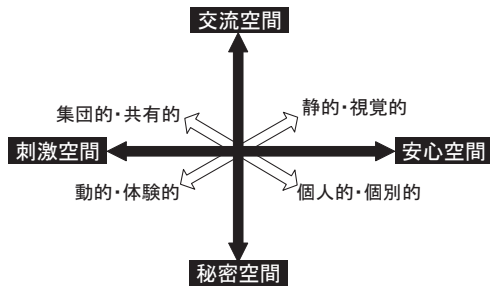


図8 場所の機能によるMDS布置(図6)の再解釈

点から、原風景について「恐怖空間」、「秘密空間」、「危険空間」、「禁止空間」、「安心空間」、「交流空間」、「探検空間」という7つの類型があることを指摘している。もちろん、大学のキャンパスが原風景として機能するかどうかは議論の余地があるが、南他(1994)を参考に図6を見てみると、図の左から右に、「刺激空間」⇔「安心空間」という軸とも解釈することが出来るのではないだろうか(図8)。同様に、図の上から下に、「交流空間」⇔「秘密空間」と解釈することも可能である。南他(1994)の「危険空間」「恐怖空間」「探検空間」などは大学生に当てはめて考えれば「刺激空間」と言えるだろう。また、「秘密空間」というのは極端かもしれないが、図6の下に布置された語句を含んだコメント内容を見ると、1人あるいは、恋人や親友などごく少数の人との関わりについて言及しているものが多い。

このように見ると、大学という場が学生に対して持っている機能として、例えば「中央芝生」や「社会学部」「図書館」は学生たちの交流の場を提供し、「チャペル」「卒業論文」「新月池」といった場や時間は学生たちに自分に向き合うことや親密な関係を形成する機会を与えているのだろう。また、「グラウンド」や「先輩」「ゼミ」という存在は様々な刺激を与えてくれ、身体的な鍛錬や知的好奇心を満たしてくれるのだろう。甲山を背景とした正門からの美しい景観は安心や安らぎを提供してくれているといえるかもしれない。

本稿で論じてきた、場所と思い出の関係につい

て、厳密な検証がなされているとは言い難い部分もある。また、関西学院大学という限定された空間での議論であり、一般化するにはまだまだ研究の蓄積が必要であろう。例えば他の大学との比較や、属性とのより詳細な検討(例えば多相対応分析など)などを行い、さらなる分析を進めていくことが本研究の課題といえる。

引用文献

- Duffy, K. G., & Wong, F. Y. (1996). *Community psychology*. Boston: Allyn and Bacon. (G. K. ダフィ・F. Y. ウォング・植村勝彦(監訳)(1999). コミュニティ心理学: 社会問題への理解と援助 ナカニシヤ出版.)
- Halbwachs, M. (1968). *La mémoire collective*. Paris: Presses universitaires de France. (M. アルヴァックス著・小関藤一郎訳(1989). 集合的記憶 行路社.)
- Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The student of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.
- McMillan, D. W., & Chavis, D. M. (1986). Sense of community: A definition and theory. *Journal of Community Psychology*, 14(1), 6-23.
- 南博文・難波元実・塚本俊明・小原潔・上向隆・吉田直樹・松崎えりか(1994). 地域社会における子どもの遊び環境アセスメントと親子の環境 マツダ財団研究報告書青少年健全育成関係 8, 57-73.
- 中野康人(2010). 社会学は「役立つ」学問か—関西学院大学社会学部卒業生調査の分析(2)— 関西学院大学社会学部紀要, 110, 23-32.
- 岡本卓也・林幸史・藤原武弘(2009). 写真投影法による所属大学の社会的アイデンティティの測定 行動計量学, 36(1), 1-14.
- Relph, E. (1976). *Place and placelessness*. London: Pion. (高野岳彦・阿部隆・石山美也子(訳)(1991). 場所の現象学 筑摩書房)
- Tuan, Y. (1974). *Topophilia-A study of environmental perception, attitude, and values*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall. (小野有五・阿部一訳(2008). トポフィリア: 人間と環境 筑摩書房.)
- 渡邊勉(2010). 大卒者の入職過程と職業キャリア—関西学院大学社会学部卒業生調査の分析(1)— 関西学院大学社会学部紀要, 110, 1-22.

Memorable Spots on Campus

— Analysis of a survey of alumni of School of Sociology at Kwansei Gakuin University (3) —

ABSTRACT

This paper aims to confirm the memorable spots on campus of the alumni of School of Sociology. Analysis of a survey of alumni reveals the characteristics of the memorable spots. The results show that: (1) the most memorable spots are the central-lawn (chuo-shibafu) and clock-tower (tokei-dai) which are symbols of the university, (2) memorable spots differ by class year, (3) many of the memorable spots are shared among friends, (4) connected to a particular memory in a particular spot, (5) remembering beautiful on-campus landscapes increases the place-identity connection; (6) university spots can be categorized into places of ‘communication’, ‘stimulation’, ‘secrets’ and ‘safety’. Finally, the relationship between the spots and memories is discussed.

Key Words: place and memory, survey of alumni, place-identity